

## 『中江藤樹 村の先生 Part 2』

次の日、ただちに小川村へ向かった若侍は、この聖人のことを人に尋ねながら家までやってきて、来訪の理由を告げました。藤樹はびっくりした様子で、自分は村の教師にすぎず、お侍が遠国からはるばる会いにくるような者でないと断り、丁重に断りました。若侍は食い下がりました。師と誓った人のもとから一歩も動こうとしません。一方の藤樹も毅然とした態度です。この客人はとんだ思い違いをされている、自分は村の子どもたちに教えているだけなのだ。どれほど懇願しても、師のお許しが得られないため、若侍はひたすら粘り強くお願いすることで、この聖人の謙虚さに打ち勝とうと決心します。

師の門のそばに姿勢を正して座り続けました。何があろうと、姿勢が崩れることはありませんでした。

三日三晩座り続けると、藤樹にとって大きな存在である母親が、この若侍のためにとりなしました。この若侍こそ、熊沢蕃山でした。のちに大藩岡山の財政および藩政を任せられ、その地にいま残る数々の改革をもたらした人物です。

弟子がたとえこの蕃山ひとりだったとしても、藤樹の名は日本の大恩人のひとりとして、やはり記録されていたでしょう。

後に、岡山藩主が、家臣の蕃山から、師である藤樹の人格がいかに高潔であるかを聞きつけ直々に訪問をした時のことです。このような訪問は異例です。

しかし、岡山藩主の予想に反し、藤樹も村も、これほどの賓客を出迎える用意を一切していませんでした。この時、藤樹は村の子どもたちに「儒教」を説いているときでした。講義が終わるまで玄関で待っていただくよう伝えました。藩主にとっては、驚くべき扱いでした。講義が終わると、藩主は、普通の人に対するのとまったく同じ態度で迎え入れられます。自分の師として、相談役として、仕官してもらえないか乞われた藤樹は、自分の使命はこの村と、母と一緒にいることにあります、と言って辞退します。藩主がこの異例の訪問で得られたのは、自分の名を門人として連ねさせてもらうことと、藤樹の代わりに長男を岡山へよこしてもらう約束だけでした。教えを乞いにきた貧しい若侍には、あれほど謙虚な態度を示したが、威厳ある態度でやってきた大名には、これほど堂々たる態度を示しています。

国中の人びとから「近江聖人」と呼ばれるようになる藤樹は、まさにその名に値する人物でした。

こうして、世の賞賛の的となり、ほかにも多くの大名が、領内の諸問題に助言を求めて訪問するようになりました。

藤樹の道徳体系で何よりも注目すべきは、謙譲の美德を最高位としていた点です。

それは、ほかのすべての徳が生まれる根源的な徳であり、謙譲の美德のない者にはすべてが欠けている、と考えていたのです。「慢心は損を招きますが、謙譲は天のみちです。謙譲すなわち虚。虚心であれば、善悪の判断はおのずと生じます」と言っています。ではどうすれば、このような徳の高みに到達できるのか。藤樹の説く方法論は、きわめて単純なものでした。「徳を大切にしようと思うなら、日々、善を行なうことです。善をひとつ行なえば、悪がひとつ去って行きます。善を毎日行なえば、悪が毎日去って行きます。昼が長くなれば夜が短くなるように、たゆまず善にはげむことで、悪は一切なくなるはずですよ」と言っています。

藤樹の人生は長くありません。四十歳で、その人生にふさわしい最後を迎えます。死期が迫っていると知ると、門人を呼び集め、いつものように正座をして「世を去るときが来ましたが、この道がこの国から消えてなくなってしまうようにしてください」と言ってから亡くなりました。近隣の人びとは揃って喪に服しました。師に敬意を表し、諸大名からは代理の者たちが送られてきました。国をあげての葬儀となり、徳と正義を大切にする人々はみな、日本にとって大きな損失であるその死を悼みました。

数年後、藤樹が住んでいた家は村人たちに修理され、明治の当時まで残っていました。

藤樹の名を冠した神社が建てられ、年二回、記念祭が行なわれていました。藤樹の墓を訪ねれば、だれか村人が案内してくれるはずですよ。そのとき、簡素でも必ず礼服を羽織るはずですよ。

三百年も前の人になぜそれほどまでに敬意を表するのかと尋ねると、こんなふうに答えてくれるでしょう。

「この村でも近くの村でも、父は子に優しく、子は孝行で、兄弟は互いに仲良くしています。

どの家からも怒声は聞こえませんが、だれもが穏やかな表情をしています。これもすべて、藤樹先生の教えと、のちのちまで及んでいるその影響のおかげです。この村ではだれもが、先生のことを感謝の念を持って崇めております。」

教育の奥深さを知らされる話でした。

